魔術のある異世界での物語

edenn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔術のある異世界での物語

【Ｎコード】
Ｎ６９７１Ｘ

【作者名】
ｅｄｅｎｎ

【あらすじ】
幼い頃から彼は病弱で狭い世界しか知らなかった。
長年の治療もむなしく彼は命を落とし、死神に魂を回収されてしまう。しかし彼の人生は魂を回収された。その瞬間から新たに動き出す。

明日プロローグ第二幕を更新します。
それでプロローグ終了です

プロローグ：死亡

暗闇に閉ざされた空の彼方、そこには天に続く道があるという。
幼い頃から俺は病弱で学校なんて一度も行ったことがない。
知る世界は病室の小さなベットと窓から見える街並みと
夕暮れ時に訪れる淡い太陽の光と・・・　　・・・暗闇の空にかかる万に輝く星々と、
それから――俺は言葉が浮かばなかった。風景が浮かばないんだ。
俺は自然と頬に涙を流した。しかしその涙を自分の手で拭うことはできない。
すでにそんな気力、いや体力は残っていないのだ。
俺の人生は後数分の後に天へ召されることになる。

胸のどこかで俺はそう思った。

体の節々が悲鳴を上げ、限界だと、もうダメだと叫んでいる。
それは声ではなく痛みで感じることができた。
ここ数日、俺は生命維持装置を付けなければ呼吸することすらままならない状態で
度々意識を失うようになった。そしていつも意識が思考の彼方に消えていくその瞬間が
ひどく怖かった。眠ってしまえばもう目覚めない様なそんな気がしていたからで・・・　・・・
朝病室で目を覚ますと生きている実感が生まれる。それは全身に走る痛みのおかげだった。
その痛みがあるかぎり俺は死なない、死んでない。そう実感する。

そして今日、多分俺は本当に死ぬんだろう。
いつもなら俺はこんな夜更けに起きたりしない、朝を起きて看護婦さんや
母や父の顔を見て、それでジッと空を眺め一日を過ごす、けれど今日は違う
昨日の晩寝て、起きたら夜だった。空には太陽ではなく月が広がり大地を包み
星星が踊る、風は冷たく吹き抜け、その風を俺は死神の吐息のように感じた。

そこで俺は人肌の温もりを腕に感じた。

―――暖かい・・・　・・・

俺はその手の温もりを知っている。
それは母の温もりで、優しくてそして温かい。

俺の人生の中で最も俺を愛し、育ててくれた人―――
俺はそんな母に5歳の頃スカートをはかされたことがある。

もちろんそれはこの小さな病室の中でだけど。
俺の両親は昔から娘が欲しいと思ってたらしい。
俺の名前も変わっていて、青崎（あおい）　美琴（みこと）って言うんだ。
名前だけ見るとまるで女の子のように思われる。新米の看護婦さんは
よく折れの事を女の子だと勘違いして病室に入って来たりする。
更に悪いのは母はスカートを履かせると男物の服を全部家に持ち帰ることがあるんだ。
それには毎度毎度恥ずかしい目にあった記憶がある。
その頃から思っていた頃がある。俺がもしも生まれ変われたとす

るならば———

俺は母の望んだ———

父の望んだ———

『女』として生を受けたい———

そして人並みに生きて———

———人並みに世界を見てみたい

そして願わくば、母の声も父の声も忘れていないことを願う。

意識が薄れてゆく、頭の中が空っぽになるようなそんな感じ、

全身に走っていた痛みが嘘のように消え、ひどい眠気が体を襲う。

ーーーこれが・・・　・・・・死

言葉にならないその思いを胸にいだき、そして全身の血が熱が徐々に薄れていくのを俺は感じた。
どうしよもない死の運命、この数十年俺は必死に死と戦い
そして負けた。負けるのは嫌いだ・・・・・・

だがどうしようもない、すでに死の一歩手前まで俺は足を踏み入れている。

俺はそこで薄れ行く意識の中、視界の先に信じられない物を見た。
それはおそらく死にゆく者にしか捉えることのできない存在。
空中に浮かび、全身黒色のローブを纏っている。
そして頭にかかるローブの暗闇の先には月夜の光に照らされた
美しい一人の女性の顔が女神のように映しだされている。

ーーー死ぬ前に女神に会えるなんてラッキーかな・・・　・・・・

俺は心の中でそうつぶやいた。

「私は女神などではない、生を狩る死神だ」

ーーー死神、そっかでもやっぱり俺はラッキーだよ

俺は再び胸の内でそうつぶやいた。

それと同時に美しい死神はどこからか大きな鎌を取り出し大きく振り上げると

「死神にあえて喜ぶ者など今までいなかった。どうしてお前は私に会えて幸運だと思える？」

――やっぱ綺麗だからかな・・・　・・・・

「そうか・・・　・・・」

その瞬間死神の握る大鎌が空中を走り、つぎの瞬間俺の心臓に鎌が突き刺さる。

同時に俺の意識は暗闇に侵食され、フッと途切れた。

プロローグ：死亡　（2）

意識が闇へ落ちてどれぐらい経っただろう———

俺は永遠とも思える暗闇の彼方で姿も無く、ただ青い球体の姿で漂っていた。

死の定義については俺も昔、本などで読んだことがある。

医学上の死の定義とは脳死、もしくは生命維持機能の停止を意味し、

宗教では精神が肉体から離れ喪失することを示す。

ならば、人は死ぬとどこへ行きどうなるのか。

ある者は死すると天界へ導かれ、極楽を数十年過ごしそして転生するなどと言う者もいれば

死すれば無の闇が永遠に続き死者はその闇で永遠に漂う、っというモノもいる。

死後の世界がどういったものなのか？　生者では決して知ることの出来なかった

その世界を俺は今、それを見ている。

無———

ただその言葉が似つかわしかった。

何もない、行くども行くども同じ空間が続き、螺旋の闇が果てもなく続いている。

———これが『死』の先にあるものなのか？

俺は心の中でそうつぶやき、そして再び俺は言葉を紡ぐ。

ーーーなんて虚しい空間なんだ・・・・・・

ーーー音も、風景も、光すらない、死とはこれほど虚しいものなのか？

俺は心の中で憤り、そしてその後に残る虚しさが俺の感情を殺す。

そこで突然俺の視界の先に亀裂が走った。それはビリビリと音を立て、暗闇の世界に
変革をもたらす。　俺はそれをただ呆然と眺めていた。

亀裂の先から大きな鎌が刃先を覗かせ、そして可愛らしい声と共に黒いフードを纏った
女が暗闇の空間にその姿を表した。
俺は彼女の顔に見覚えがあった。

ーーー君は・・・・・・死神さん

あの時の可愛らしい死神だ。

「ふぅー少し書類審査に手間がかかってな、お前を迎えに行くのに時間がかかた」

俺は彼女の前に姿なくして歩み寄り、病室の時と同じく心の声で

会話を試みる。

―――書類審査？　迎えに来た？　どういうこと？

女の死神が言った言葉には書類や迎えなど状況を把握できないことばかりで

俺は困惑するようにして心を乱し、そう思い女に伝える。

「そうだ、書類審査とはお前が生者の頃に犯した罪や良いことを総合的に判断し

そこでお前が転生に値する人間かを決める審査の事だ」

俺はその言葉を聞いた瞬間、『失格』の二文字が頭をよぎった。

俺は生まれて以来、母や父に体の弱いせいで、心配ばかりかけてきた。

それは親不孝者で、更に言えば良いことなんて一度もしたことがない

正確に言えばできない体だった、っと言うのが正しいかもしれない。

俺は恐る恐るその結果を女の死神に尋ねた。

―――で・・・・・結果は？

死神の女はわずかに頬を緩めると、微笑を漏らした。

「案ずるな、お前は合格だ、したがってこれよりお前を天界へ導き

神々の祭壇へ連れて行く」

死神の女はそう言うと、俺の体（魂）は彼女が手を伸ばすと
彼女の手のひらに吸い込まれるようにして吸い寄せられ、そのまま俺は小さな小瓶に入れられると
彼女は亀裂の中へ俺を抱え入っていく。

■■■■
無数の稲妻と赤色の閃光、それが亀裂の中で俺のすぐ脇を通過する。
もしもあの稲妻がこのビンにあたりでもしたら俺は間違いなくこの世から消滅してしまう。
そう思った。しかし俺にはどうしようもない、俺の運命を握っているのは死神の彼女で俺ではないからだ。

―――まだつかないの？

死神の女の背を眺めながら俺はそう尋ねると、女は振り向くことなく即答した。

「付いた」

その瞬間、空間が一変した。

光―――

それは眩いばかりの温かい太陽のような熱を放つ光の満る空間。
俺はその瞬間そう思った。更に目を凝らすと地面は雲のようなふわふわとしたモノでできており
そのすぐ先には大きな門が佇んでいる。

「ここが天空界、１２の神の王が存在する空間、この門の先に神々がお前を待っている」

そう言うと、死神の女は俺を抱え、巨大な門の先に立つと、手のひらをペタリっと

その扉につけた。同時に門に光が天使の輪のように丸く走り、同時に扉は大きな音を上げながら開門した。

門の先には一本の道が続き途中で途切れている。その途切れている場所まで死神の女が進むと

「神々よ、例の者をさまよいの暗闇から連れて参りました」

そう言うと、俺はビンから出され、空間に漂わされる。

その瞬間、途切れた道の先から突然光が生まれ、同時に人の姿をした存在がその場に姿を表した。

数にして１２人、それぞれが違う顔をし、老人から青年までその姿は様々、俺はその光景に圧倒されながらも

彼らを見据え、息を呑む。

「ご苦労、死神の子よ、お前はもうよい、下がっていなさい」

その声に死神の女は頷き、俺の後ろへと下がった。

同時に俺の真正面に佇んでいた黄金色の髪をした老人が指を合わせ、パチンと音を上げると
突然１２の豪華な椅子が足場のない空間に突如生まれ、その椅子に神々が腰を据える。

「では諸君、始めるとしよう」

その声に１１人の神々が頷き一斉に俺に視線を向けた。

「ではまず初めに、そなたに尋ねることがあるよいか？」

―――はい、構いません

俺は即答した。

「うむ、では聞こう―――そなたは生みの親である母や父を恨んではいないかね？
君は幼い頃から病室ぐらしで、広い世界を見ることも学校へ行くこともかなわない
そんな病弱な体にした彼らを憎いとは思わないのかね？」

そんなこと俺は思った事は一度もない、母さんは優しく誰よりも優しくて
父さんは俺が倒れたと知ると大事な会議だって擲って病院に飛んできてくれた
そんな父を、そんな母をどうして恨むことができる。

―――感謝してるよ。俺はあの人達が大好きだから

その答えに神々は頷き満足したのか微笑を浮かべる。

「うむ、その言葉を聞けてわしらは嬉しく思うぞ、では続いて転生の義についてなのじゃが・・・・・・
残念ながら今、そなたのいた世界の生者の席は満員なのじゃ、したがって別の世界へ送ることになる」

―――別の世界？　それはつまり異世界ってことですか？

「そうじゃ、もちろん転生すると前世の記憶つまりいまのそなたの記憶は失われ
新たな生の器に入り、後に続く人生を歩むことになる」

神の言葉つまり転生してしまうと母や父との思い出をすべて忘れてしまうことを示していた。
俺はこの気持を、母の顔を父の顔を家族の愛を忘れたくない。

―――記憶がなくなるなんて、そんな・・・・・・

俺は心の先で訴えるようにそう叫んだ。

その声は神々の耳にも届き気の毒そうな表情を浮かべこちらを見ている。

「そなたの気持ちもわかるが・・・・・・」

そこで長い髪の女神のように美しい優しげな表情を浮かべる女の姿をした神が声を漏らした。

「記憶・・・・・・それは彼その者であり、彼という存在の証でもある。

それを失うということはつまり死を意味する事になります。我々はそれをいくどもなく繰り返し

そして世界の生の流れをつなげてきました。しかし彼は生の輪の及ばない異世界へ転生するのです。

果たしてここで彼の記憶を奪う必要があるのでしょうか」

その言葉に空間がどよめき立ちそしてすぐに静まった。

「やはり記憶を持ったまま、転生は許されない」

俺はここですべてを失い、真っ白な状態で新たな人生を歩みだすことになる。
それはまるで白紙の紙に新たな自分を書き記していくような感覚なのだろうか。
何にせよ、俺はもう記憶を失い新たな人生を進まなくちゃならない。

―――今の自分が消えて、新たな自分に蘇る。それが転生ってことなら俺はこの記憶を失ってもいいかな・・・

俺は自分の存在が消えてしまうことを受け入れた。

「いいのか？」

―――いいよ、もうそれしか道がないならそうするしかない。いくら望んでもどうしようもないことはあるから

俺が望んだのは記憶が消えないことで、でもそれは叶わない事で、どうしようもないこと、
今俺がここでできるのは新たな俺となるその魂の主の幸運を願うこと。

「うむ、そうか、分かった。では転生の義を行うことにしょう。最後に何か望みはあるか？」

―――次生まれ変われるなら女になりたい。それも俺みたいに病弱じゃなくて元気に野原を駆けまわるような

―――そんな女に・・・・・・・

それは母の願いで父の願いで、俺自身の願いでもある。

「いいだろう、では始めよう・・・・・・」

その瞬間、浮かんでいる空間に無数の小さな光が無数に現れ、空間に満ちてゆく。

神々が一斉に手の平に赤や青、白や緑と言った輝きを放つ球体を手のひらに作り

そしてそれらを一斉に俺の体（魂）に向けて放ち、それらを浴びた瞬間俺の意識は

何もない、暗闇の彼方へ消えて言った。

■■■■

天空の彼方、転生の義を終えた神々が席から退席し離れていく中、長い白銀の髪をした女の神が

黄金色に輝く金色の髪の男から小さな光の欠片を受けるとと微かに笑った。

「記憶の欠片、確かに受け取ったわ、ついでに１２神の皆さんからも妙な玉を預かったわ」
「成功すると思うか？」
「どうでしょうね、私の力は人を治癒し生命を与える力、その力の断片を彼の転生後の体に
注ぎ、記憶の断片と共にその体の中に眠らせる」
「１２神すべての判断によりこれは行われることになったわけだが
少し遊びを入れすぎではないか？　人の子に生命を癒す力を与え、他な神々も妙なものを君に
渡したようだし、彼に肩入れしすぎのきがするが」
「あら、あなただって、このとおり、記憶を消滅ではなく取り出して私に渡してるじゃない
あなたもなんだかんだ言ってるけど彼の事を気にしてるんじゃない
みんなでやれば怖くない、そうでしょ」
「・・・・・・」
「まぁーそういうことだから、私は彼の飛んだ世界へ少し出かけてくるわ」
その瞬間、空間に閃光が走り、女の神はその姿を消した。

世界は移り、魔法と魔物のあふれる異世界へ－－－

天空には夜月が大地を照らし、大地にはランプの小さな灯りが街中に灯り輝いている。
大きな庭がある大きな屋敷のとある一室で母と父に挟まれながら幸せそうに眠る少女。
それらの微笑ましい光景をランプを片手にうれしそうに眺める一

人の少年の姿があった。

少年は数年前この屋敷の主、旦那様に拾われ、わが子のようにこの家の人たちは少年を
可愛がり、少年もその恩を返すべく日々この家の執事になるべく執事長の元厳しい
特訓に耐え、日々を生きていた。そして夜の見回りは少年の仕事だった。

少年はゆっくりと部屋の扉を閉める。
いつものように一階へと続く階段を降り、戸締りを確認する。
空間は暗闇に閉ざされ、視界の便りは手に握るランプの温かい光のみ、
少年の握るランプの光が空間を照らし込む。
そこで突然、足元に何か引っ掛かり少年は勢い良く地面に転倒する。
同時に両手に生暖かい何かが触れランプの火が地面に広がる。
その瞬間、少年は飛び上がり必死に広がる火の手を自らの上着で消そうとするが
それを止めるように足が何者かに掴まれた。

「うわ」

少年は一瞬声を漏らし、火の明かりで照らされた足元を見た。
同時に少年の表情は凍り付いていくように血の気が引き、そして慌ててその存在に歩み寄る。

「じいちゃん、どうしたんだよその傷」

声の先にはおびただしい血を腹から流し、倒れている執事長のバロン爺さんの姿があった。
同時に数秒前に感じたあの生暖かいモノの正体を理解した。

「じいちゃん、どうしてこんな・・・・・・」

再び少年の声が漏れ出ると、血まみれの老人は途切れ途切れに言葉を口にした。

「ルイス・・・・・・お前は旦那様たちの元へ・・・・・・・
急げ、旦那様たちが危ない――」

そう言葉を残すとバロンは目を開いたままその場に倒れ伏せた。

少年は何がなんだかわからず、ただ、旦那様たちのいる部屋へバロンの目を手で閉ざし
走った。

手の平にはまだあの生温かいバロンの血の感触が残っている。

少年は脳裏に最悪な光景を思い浮かべた。
バロンと同じく地面に倒れこむ旦那様たちの姿。

少年は頭を左右に振り、少年はただ、走った。夢中で走りそして部屋の扉を押し開いた。

扉の先では剣を抜き、母と子を守る旦那様の姿が映り込む。
しかし数秒後、鉄と鉄の触れる音と共に旦那様の剣が空を飛んだ、
続くように三人の黒い服を着た男たちが同時に旦那様の体突き刺し、

旦那様は地面に倒れ、動かなくなる。同時に空中を舞っていた剣が少年のすぐ目に突き刺さる。

少年はその光景を見て、絶望した。少年では決して目の前の男たちには歯が立たない

剣術も魔法も何も習っていない少年には、今逃げれば自分は助かるかもしれない。

そう一瞬脳裏に考えが浮かぶが、それをすぐに首を横に振り打ち消した。

少年にとって目の前の人たちは家族で守らなくてはならない存在だった。

だから少年は旦那様の剣を手に取り男たちに向かって突進した。

それを男たちは軽く避け、少年の後ろへと回る。

少年はそのまま走り、赤色の長い髪の女性の前に立つと男たち剣を構えた。

少年の背後で声が漏れる。

「ルイス君、どうして・・・・・・」

「僕は旦那様たちに拾われこの屋敷に来ました。それまでは愛も人の暖かさも知りませんでした。ここへ来て僕は変わったんです。バロンさんに出会い奥様や旦那様に出会って僕の人生は変わったあなたたちのためなら僕は・・・・・・」

震えた声で目の前の男たちに恐怖を覚えながらも少年はそう声を出した。

「ありがとう・・・・・・君になら娘をたくせるは」

そう言うと、突然ルイスの体が反転し、背中を強く打ち付ける同時に天井が映り込む。

更に視界の先に奥様の姿が移りこみ、少年の目を見据え、小さな少女を少年の手に抱かせ

続くように首にかけられた青色の小さな宝石の埋めこんであるネックレスを少女の首にかけると

涙をポロポロと流し言葉を紡いだ。

「アネット、私達はずっと、永遠に貴方を思っているわ・・・・・・

どうか、誰よりも幸せに、そして強く、優しい子になって・・・・・・」

その言葉と同時に女は少女の首にかかる宝石に青色の光を注ぎ込む。

瞬間、空間に光が走り、二人を包み込んだ。

同時に意識が突如途切れ、暗闇にへと吸い込まれる。

それから数秒、数分、どれほどの時間眠っていたのかわからいないまま少年は

目を覚ました。　少年の視界の先には小さな泉が映りこみ、その泉を囲むように

木々が生い茂り、夜の月光を泉の水が反射していた。

慌てて少年は少女の姿を探るようにしてあたりに目を走らせた。

すると、視界の端に白銀の髪で美しい容姿の大人の女性のが映り込む。

その女の胸にはあの少女が抱かれている。

少年は重い体を無理やり動かし、女の前に歩み寄った。

「あら、起きたのね。もうしばらくこの子を抱いていたかったけど、やめとくわ

用事は済ませたし、この世界の人の運命を少し変えちゃったからね。はい

この子頼んだわよ」

そう女が口にすると、女は少女を少年に渡し、森の中へとその姿を消した。

プロローグ：死亡　（２）（後書き）

これでプロローグ終了です。　ふぅーすごく文章が長くなってしまった

次回から２５００字くらいで書いていきます。

第一章：大切な人のために（1）

空に浮かぶ、星星の輝きが水桶に継いだ水面に浮かび上がり同時に朱色の髪をした薄赤色の瞳の幼い少女の顔が映り込む。
その姿は紛れも無く私で、今にも泣きそうな顔をしていた。
私は目を閉じ左右に首を振って自分に言い聞かせるようにして声を上げた。

「私が頑張らないと、私が・・・・・・」

私は水桶を両手で力いっぱい持ち上げた。
同時にバシャンっと水が左右に移動し小さな水しぶきが上がる。

「おっとと」

可愛らしい声を上げ、私は水桶を両手に持ち、少し急斜面な坂道を登っていく。
その道は獣道のように草木が生い茂り、数分ほどかけてその坂道を登る。
獣道を抜けると、立派とは言えないけど冬の寒さや雪にも強い木造の家がある。
その家はここ7年間ずっと私が食べ、眠り、笑い、生活の中心となっている場所。
すっかり軽くなってしまった水桶一度地面に置き、家の扉を開くと再び水桶を両手に

しながらを家の中へ水桶を運び入れる。

「フゥー」

慣れない事をするとこれほどまでに体は疲れてしまうのか、私はそう思った。

普段の私はこの小さな家の中で文字の勉強ととある国の勉強をさせられている。

その先生は私と一緒に暮らしていて綺麗でかっこ良くて頭もいい、頼りになって

いつも私の身の回りのお世話をしてくれる。私は一人で出来るって言ってもあの人は

微笑みながら、私から仕事を奪っていく。

８歳にもなれば身の回りのことは当然自分でできるようになるし、全部人に任せっきりなんて

私は嫌だった。でも今日は私の仕事を奪う人はいない。

いつも仕事を奪うあの優しい人は今ベットの上で熱を上げて眠っている。

ーーー今日は私の自由にやらせてもらうからね

私は視界の先に映り込むベットで眠る彼を眺めた後すぐに物入れの木箱から

一番綺麗なタオルを取り出し資格に折りたたみ水桶にタオルを入れる。

同時に手のひらに冷たい水の感触が広がる。

私はそれに一瞬身を震わせ、そのまま力いっぱいに水を絞る。

「えい！　まだまだぁー」

幼い声が部屋に小さく響くと私は水気を少し帯びた桃色のタオル手に取り綺麗に四角に折りたたむ。

「よし」

そのまま私はベットで寝息を立てている黄金色の髪をした綺麗な男の前に歩み寄り

持っていたタオルを彼の額にそっと起こさないように載せた。

すると、つらそうだった表情がすこし和らいだような表情になる。

私はそれを見て微笑を浮かべた。

だって、私の行動で彼はこんな顔をして眠ることができて、それってつまり私がほんの僅かでも

彼の役に立ったってことで、だから私は嬉しかった。

すると、私の頬に暖か感触が走る。

それは人肌の暖かさで、優しい人の手、

「お嬢様・・・・・・これはお嬢様が？」

風邪声で彼はそうつぶやくと、私は彼の言葉に頷いた。

「すみません、私が不甲斐ないばかりに・・・・・・でももう大丈夫です。

お嬢様の優しさが私の病気を治してくれました」

そう言って彼はベットから立ち上がろうとする、それをすかさず
私は止めた。
「ダメ！　ルイスはちゃんと風邪を治して、今日は私がルイスの看
病をするから」
幼さの残る声で私はそう言うと、彼の体を小さな手で思い切り押
し倒した。
同時に彼の心音が耳に響く、ドックン、ドックン、それは何度も
聞こえる。
同時に私は彼から離れ、顔を曇らせた。
普段なら私の力なんて片手で粉砕されてしまう。
だけれど、今の彼はほんの小さな私の力にも負けてしまうほど弱
っていた。
「お嬢様、そんな暗い顔なさらないでください。先程も言ったように
私は大丈夫ですよ」
「ウソ、ルイスはウソをついてる。だって苦しそうじゃない！
私は子供だけど、馬鹿じゃないもん。私は風をひいちゃうと
辛いし体が重くなるよ？　誰だってそうだもん、ルイスは優しいし
頼りになるし、頭もいい、いつも私のことを思ってくれて
でもいつも私はルイスに助けられてばかり、少しくらい私を頼っ
てよ
子供だけど赤ん坊じゃないもん。自分ことは自分でできるし
ご飯だって料理本を読んで少しくらいなら作れるもん
だから、お願い、今日だけは、自分のために私の為じゃなくて
自分のために体を休めて、それでもルイスが無理をして体を動か
したら

私は泣いちゃうよ？　ずっと、ずっと、泣いて泣いて涙が枯れるぐらいまで泣いてやるんだから」

私は涙を抑えながら泣き声でそう言った。
すると、やっと納得したのか、彼はわずかに微笑を私に向けるとベットに倒れこんだ。

「分かりました。今日は安静にします。ですからお嬢様、泣くのはやめてください」

私は彼の言葉に頷き、しばらく彼の顔を眺めた後、私はすぐ隣にある柔らかな羽毛の
敷き詰められたベットの上に倒れこみ、吸い込まれうようにして体が下へと沈む。
猫のように丸く丸まり、私はそのままそのベットの上で目を閉じた。

それから1時間ほど立った頃、私は浅い眠りから目覚め、ベットからそっと降りると
月の光がわずかに入りこむ家の中で私は音もなく家を飛び出した。

それはある本に書かれていたこの季節の、月が夜を照らす頃、大きな大樹の根元に咲く
リオンの双子っと呼ばれる七色の花びら、熱に効く薬草と、数日前偶然読んだ
本に書かれていた。
それを私はつみに行くために夜更けの森に向かって足を進めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6971x/

魔術のある異世界での物語

2011年10月19日02時05分発行